

東日本大震災の経験を 社会の未来にどう生かすか

石巻専修大学 復興ボランティア学の構築へ

東日本大震災から3年半を経て、被災各地での復旧作業は少しずつ進みながらも、仮設住宅での暮らしが日常となりつつある人々はいまだ多く、なお課題は山積している。被災当時、多くの市民を受け入れた石巻専修大学の坂田学長に、いまあらためて大学が地域に果たす役割と、今後10年単位で続く復興への貢献について、ジャーナリスト・高田広報部長が聞いた。

10年単位の復旧復興へ、 学長の役割はペースコントロール

高田和男専修大学校友会広報部長（以下、高田）

●痛ましい震災から3年半が経過しました。改めて震災直後の石巻専修大学の状況をお聞かせください。

坂田隆石巻専修大学長（以下、坂田）●春休み中のことでしたが、学内には部活動などの学生が200人ほど、一部の教員と卒業式の準備などで出勤していた事務職員がいました。学内では命や身体にかかわる被害はありませんでしたが、震災後に学費減免を行った学生と、私学共済の見舞金もらった教職員を合わせると、大学関係者のほぼ3分の1が明らかな被災者となっています。また残念なことに学生6名、入学予定者が1名亡くなっています。その多くは地震後の救助活動中に津波に巻き込まれて命を落としたようです。それだけの行動力をもった若い命が失われたのは、非常に残念なことだと思います。

高田●坂田学長も震災当日には学内にいらっしゃったのですか？

坂田●私は札幌に出張中で、翌日、学校法人の震災対策本部（神田校舎）へ入りました。石巻までの交通は途絶しており、本部でも緊急対応すべき課題が山積でし

た。また、混乱状態にある現地から少し離れたところで、いろいろな判断を下すということも重要な仕事でした。

高田●石巻にはいつ頃戻られましたか。

坂田●震災後1週間ほどしてからです。戻ってからも私の役割はペースコントロールでした。もちろん当初は命にかかわることですから、現地はフルスパートです。しかし、ちょっと落ち着いてからは、それでは保ちません。地震の最初の報に接したとき、「これは10年単位の仕事になるな」と直感しました。私が学長を続けるかどうかは別として、復旧復興は長期的のスパンで取り組まなければならない仕事です。ですから、極端に言えば「無理は続かない」と言うのが、私の役割だと考えていたのです。

震災直後、穏やかに被災者を 受け入れる職員に感心

高田●貴学は建学の精神に「社会に対する報恩奉仕」を掲げていますが、被災からこの間、その精神が発露されるような場面はありましたか。

坂田●震災直後、多くの被災者の方が本学に避難してきました。陣頭指揮をとった人たちによれば、「受け入れるか、受け入れないか」という議論はなく、始めから「どのように受け入れるか」という

ところからスタートしたそうです。日頃から「社会に対する報恩奉仕」と言っているのに、門前払いをできるわけがないということです。

高田●「建学の精神」の実効があったわけですね。

坂田●また、本学では21世紀ビジョンとして「社会知性の開発」を掲げています。被災後に次々と持ち上がる課題に対して、日頃の研究や勉学を発展させて解決に取り組む教職員や学生の姿勢は、まさに「社会知性」の発露だと思います。

高田●坂田学長は、高校、大学とボート部で活躍されたそうですが、そこで培った体育会精神のようなもの、かなり発揮されたのではないのでしょうか。

坂田●ボートは判断を誤れば命の危険があるスポーツです。ですから、判断しなければならぬときには、瞬時に判断して、指示しなければなりません。その際、わざと落ち着いて、ゆっくりと分かりやすい言葉で指示をすることが大切です。リーダーがパニックに陥ってしまったら、その動揺が船全体に広がってしまいます。そこは常に意識していました。

高田●なるほど。

坂田●その点、震災直後に学内にいた教職員はよくやってくれました。石巻に戻って感心したのは、教職員が皆、緊張感

坂田 隆

石巻専修大学長

被災者を「受け入れるか、受け入れないか」という議論はなく、「どのように受け入れるか」からスタートしました



の中にも穏やかな表情をしていることでした。もちろん客観的情勢は非常に厳しく、自分自身も被災者ですから不安がないわけではない。でも、そういうことをおくびにも出さずにやるべきことをやっているわけです。

高田●それは頼もしいですね。

坂田●チームでは常に全員の調子がいいことはありません。その時、黙って調子が悪いメンバーをカバーするのがチームプレイです。その点でも、本学の教職員は非常に立派だったと思います。

「復興ボランティア学の構築」 をめざして

高田●石巻専修大学は建学以来、地域の大学として歩んできましたが、震災を機に地域との関係に変化はありましたか。

坂田●キャンパスに塀も門もない本学は、もともと地域の人たちに開かれた大学でしたが、震災後はキャンパス内では最盛期で約1,000人の被災者の方が暮らし、学内に設置したボランティアセンターには多くの復興ボランティアの方々が出入りしていました。その結果、お互いの距離が一層近づき、同じ被災者として共に立ち上がっていくという意識が生まれていると感じています。

高田●先ほど震災からの復旧復興は10年

単位で考えなければならない仕事だと仰いましたが、今後ますます少子高齢化が進み、大学進学者も相当数減ってくる時代に対するビジョンはお持ちでしょうか。

坂田●震災によって石巻では「少子高齢化は30年早まった」と言われています。今後は、より広い地域から学生が集まるような大学に成長していくことが大きな課題です。そのためには、「新しい学問」を創造することで学生にアピールしていくことが、教育研究機関である大学としての本筋だろうと考えています。

高田●「新しい学問」ということ。

坂田●震災後、例えば仮設住宅の支援やNPO法人の会計代行、「サバ出汁ラーメン」の開発など、地域と連携しながら教育研究を深めていくという新しい流れが生まれています。これは非常に教育効果が高く、例えば仮設住宅の支援に取り組むゼミの学生たちは「社会人基礎力グランプリ」の東北チャンピオンになっています。一方、教員の側も、地域の力をお借りすることで、研究の幅を広げ、研究を深化させることにつながっています。

そうした中、昨年度からボランティア団体に協力していただき「復興ボランティア学講座」という授業を立ち上げ、共創研究センターの研究の一環として「復興ボランティア学の構築」をめざしてい

高田和男

日本テレビ報道局解説委員
専修大学校友会広報部長

被災からこの間、本学の建学の精神「社会に対する報恩奉仕」が発露されるような場面はありましたか？

ます。本学の教員には、こうした取り組みを5年、10年と続けるなかで、石巻の個別事例の研究にとどまらず、大災害や戦争などで厳しい状況におかれた地域社会を復興するために役立つ、新しい学問を創造してくれることを期待しています。

高田●非常に辛い災害ではありましたが、その経験の中から地域とともに新しい大学の姿が生まれようとしているわけですね。坂田学長にはボート部で培ったリーダーシップをますます発揮して、石巻専修大学の舵取りをお願いしたいと思います。本日はありがとうございました。

7月28日(月)、石巻専修大学長室にて。敬称略

※東日本大震災の被災直後に行われた現地座談会は、アドニス56号(2011.07)に掲載しています



『東日本大震災 ボランティアによる支援と仮設住宅』（建帛社 1,900円+税）
坂田学長も責任編集として関わった、一般社団法人日本家政学会東日本大震災生活研究プロジェクトと石巻専修大学の共同研究による2年半の研究活動報告。

さかた たかし●1978(昭和53)年、東北大学大学院農学研究科修了。農学博士。1951年愛知県生まれ。愛知県出身。高校、大学を通してボート部で活動。独ホーエンハイム大学、ハノーファー獣医学教員、ヤクルト本社中央研究所、仏農林省農業総合研究機構などを経て、1989年、石巻専修大学理工学部勤務。2009年から現職。専門は比較栄養生理学。

たかた かずお●1970(昭和45)年、文学部英米文学科卒業。1947年生まれ。神奈川県出身。日本テレビ放送網入社後、報道局を中心に活躍。現在、報道局解説委員。専修大学校友会広報部長。著書に「最前線のがん治療」(日本医療企画)、共著に「科学とメディア」(悠思社)などがある。